

二国間交流事業 共同研究報告書

平成 21 年 3 月 31 日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

共同研究代表者所属・部局 横浜市立大学国際総合科学研究科

職・氏名 ^(ふりがな) 准教授・石川 文也 ^{いしかわ ふみや}

1. 事業名 相手国 (フランス) との共同研究 振興会対応機関 (ナント大学)
2. 研究課題名 日本人の仏語習得：「オモグロット」と「アログロット」のコンテキストの仏日比較研究

3. 全採用期間

平成 19 年 4 月 1 日 ~ 平成 21 年 3 月 31 日 (2 年 0 ヶ月)

4. 研究経費総額

(1) 本事業により交付された研究経費総額 2,000 千円

初年度経費 1,000 千円、 2年度経費 1,000 千円、 3年度経費 0 千円

(2) 本事業による経費以外の国内研究経費総額 0 千円

5. 研究組織

(1) 日本側参加者

氏名 (ふりがな)	所属・職名	研究協力テーマ
にしむら あこ 西村 亜子	白百合女子大学文学部・准教授	・白百合女子大学におけるフランス語学習者の習得プロセスの特徴の解明：中期・短期海外語学研修を効果的にする、留学前後の教育プログラム開発に役立つ準備的考察

(2) 相手国側研究代表者

所属・職名・氏名 ナント大学 (Université de Nantes) ・准教授・シジル・グランジェ (Cyrille GRANGET)

(3) 相手国参加者 (代表者の氏名の前に○印を付すこと)

氏名	所属・職名 (国名)	研究協力テーマ
○ シジル・グランジェ (Cyrille GRANGET)	ナント大学 (Université de Nantes) ・准教授 (maitre de conférences) (フランス)	・日本人フランス語学習者に対する海外語学研修の習得論上の意義：短期海外語学研修がもたらす語彙・文法能力の変化についての縦断的考察
ドミニク・クリングレ (Dominique KLINGLER)	パリ第三＝新ソルボンヌ大学 (Université de Paris III) ・准教授 (maitre de conférences) (フランス)	・日本人フランス語学習者の発話に現れる文および文章構成の文法・統辞的特徴：海外語学研修の影響

6. 研究概要（研究の目的・内容・成果等の概要を簡潔に記載してください。）

<研究の目的>

本研究の目的は2つある。そのひとつは、「オモグロット」のコンテキスト（外国語のクラスの外で目標言語が話されているコンテキスト）と「アログロット」のコンテキスト（クラス外に目標言語が話されていないコンテキスト）において目標言語の習得過程はどのような点で類似し、またどのような点で異なるかを明らかにすることである。もうひとつの目的は、イマージョン（immersion）の教育・学習が外国語クラス外における言語使用にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることである。外国語クラスのディスコース分析（analyse du discours）、あるいは様々な教育方法を検証し、外国での学習経験が学習者の行動に及ぼす影響を既述する第二言語習得についての研究は、目覚しく発展してきたが、言語習得の諸問題を、第二言語を使ったインタアクション（interaction）の問題の中に位置づけて考察する研究、あるいは逆に後者を前者の中に位置づけて考察する研究は、これまであまりおこなわれてきていない。本研究では、これらのふたつの問題系を結びつけながら、上述したコンテキストの類似点・相違点を明らかにし、習得とインタアクションとの関係に関する諸問題を扱う。そのような視点から、日本とフランスでおこなわれているフランス語教育・学習を特に取り上げ、これらと比較しながらフランスにおける学習経験がフランス語の習得に及ぼす影響を明らかにする。

<内容>

2007年度には、①研究分野に関する基本文献の収集と関係分野の専門家からの専門的知識の享受、②コーパス（分析資料体）の作成のための会話の収集・作成および学習者の学習背景・モチベーションを明らかにするためのアンケート調査の実施・整理、③日本側・フランス側のそれぞれのグループでおこなった分析結果の相互報告と次年度のスケジュールの調整を計画した。2008年度には、①研究分野に関する基本文献の収集と関係分野の専門家からの専門的知識の享受（以上、前年度からの継続）、②コーパスの作成のための会話の収集（継続）とその完成、および学習者の学習背景・モチベーションを明らかにするためのアンケート調査の実施（継続）とその最終整理、③日本側・フランス側のそれぞれのグループでおこなった最終的な分析結果の相互報告と総括、さらに、④2年間の研究成果の学会などでの報告を予定した。そのような計画の枠組みの中で、石川（日本側研究代表者）は、「オモグロット」と「アログロット」のコンテキストの比較：フランス語クラスのインタアクションに見られる言語習得プロセスの会話分析的特徴」というテーマで研究を進め、同時に共同研究の総括をおこなった（他の研究参加者のテーマについては、「5. 研究組織」を参照）。

<成果>

2年間の研究期間中に、フランス語の学習動機・背景などに関するアンケートを延べ105人の学習者に対して、学習者の習得状況をテストする問題によって構成されたライティング・タスクとオーラル・タスクをそれぞれ延べ119人、85人の被験者に対しておこなった。さらにフランスと日本のフランス語クラスの会話の録画・録音を合わせて8クラスおこない、そのうち録画・録音状態のよい5クラスのトランスクリプトをおこなった（次の表を参照）。

コンテキスト		アンケート	ライティング・タスク	オーラル・タスク	クラスの録画・録音*
オモグロット (フランス)	CUEF(グルノーブル大学付属語学学校)	22	0	0	5(2)
	白百合女子大(海外語学研修中)	0	0	16	0
アログロット (日本)	横浜市大	73	90	22	3(3)
	白百合女子大	10	29	47	0
合計		105	119	85	8(5)

*括弧内はトランスクリプトをおこなった数。

アンケートの結果により、大学におけるフランス語学習者のフランス語選択の動機を明らかにできた。ライティング・タスクとオーラル・タスクの結果の縦断的な考察によって、学習者の言語運用能力の発展の軌跡を明らかにできた。フランス語クラスの会話を会話分析の視点から分析することにより、クラスの内外のコンテキストが教師と学習者の言語インタアクションに及ぼす影響を明らかにできた。さらに、アンケートの結果とフランス語クラスの会話を交錯させることにより、クラス内でおこなわれるアクティビティと学習動機とを関係について考察することができた。なお、被験者に対しては、研究に参加してもらう前に研究の趣旨を説明し、「研究協力確認書」によって同意の意思を確認した。